

宮本徳蔵

虎こ砲ほう記き

新潮社

虎砲記

宮本徳蔵



著者略歴

昭和五年、伊勢市生まれ。東大仏文学大学院修了。

昭和五十年「浮游」で新潮新人賞を受賞。

昭和六十二年『力士漂泊』で読売文学賞を受賞。

こほうき
虎砲記

著者◎宮本徳蔵
みやもととくぞう

©Tokuzo Miyamoto

1991, Printed in Japan

発行 一九九一年五月一五日

三刷 一九九一年二月二〇日

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

162 東京都新宿区矢来町七一

電話 {業務部(03)三二六六一五一一
編集部(03)三二六六一五四一一

振替 東京四一八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN 4-10-380901-9 C0093

価格はカバーに表示してあります。

虎
砲
記

王
使

目
次

69 5

装
画
と
し
・
フ
ク
ダ

虎
砲
記

王 使

鶴峰・金誠一が倭人の怖さを最初に目のあたりにしたのは、対馬島に仮泊中のことである。

関白平秀吉からたびたび要求があり、それに応えて、朝鮮王李^り昭^{えん}自署の国書を携え倭都に向う船路の途上であつた。秀吉は本姓たしか羽柴のはずだが、朝鮮への書信にはつねに平氏と署名してきた。古来、倭国にあっては源平藤橘の四姓のみを貴種とする風があるゆえに、俄かに立身した彼もまた系譜を捏造し、自らそのひとつを僭称するにいたつたものであろう。総勢二百名にのぼる一行のうち誰ひとりとして、これから赴こうとする隣国について予備知識を持ち合せている者はいなかった。この前に通信使が差遣されたのは成宗の世で、倭はまだ源（足利）氏による支配を受けていた。あれ以来すでに百二十年もの歳月が流れている。年少の頃から「本の虫」と呼ばれてきた渾名を裏切らず、誠一は出立前の寸暇をぬすんで、彼が従三品の司成（教授）として儒学を講じている国立学校、成均館の書庫に入つて、およそ倭に関係のあると思える典籍や記録

をことごとく手に執つてみた。しかし、どれも夢物語めいた荒唐無稽な内容のみに充たされており、実地にのぞんで参考になりそうな記事は見あたらなかった。

対馬島主である副官平（宗）義智よしとが使臣たちの労を慰めるため、小宴を催そうとした。東の峰にある国分寺がその場所に択ばれた。ここは眺望がひらけ、順風を待つて次に渡ろうとしている一岐島いさをも間近に見渡すことができる。

正使である友松堂・黄允吉こういんきち、副使誠一、書状官の岳麓・許箴きよせいは、定めの刻限より少し早めに寺に着いた。中堂には魚介や酒の用意がなされ、義智とともに倭国側の先導をつとめる博多聖徳寺の学僧玄蘇もすでに座についていた。武人の中に儒礼にくわしい者が一人もない弊を補うべく、秀吉の意思でとくに加えられた人物とのことであつた。しかし、招待した当の義智の姿はどこにもない。

待ちくたびれた頃、山門をくぐつて近づいてくる一挺やまかこの山輦が目に入った。さほど急いているという様子でもない。輦は激しい掛声のもと石階を登り詰めると、そのまま堂内に昇ぎ込まれた。驚いている一同の鼻のさきで垂れがはね上げられ、義智が若々しく精悍な体軀を悠々と現わした。

誠一はすぐさま席を蹴つて帰ろうとした。

末座にいた訳官陳世雲が、慌てて呼び止めた。

「やつと宴が始まろうとするのに、鶴峰先生にはなぜかくも速やかに退出なさるる」

憤りのため蠟のように白く見える端正な顔をそちらに振り向けて、誠一は応えた。

「義智とはそも何ものであるか。この島には一粒の米も穫れぬため、年ごとに釜山浦に来て貢物を献じ、代りに一万俵を下賜されようやく露命を繋いでいる、いわばわが朝鮮の藩臣同然の者ではないか。しかるに、正式の王使たるわれわれを迎えるに当って、かかる非礼を敢てする傲慢は何ごとだ。物の道理のわからぬ人間の酒盃を受けるわけにはいかぬ」

そう言い終えると、同僚二人の方へと固い視線を移した。上席の允吉は咄嗟にどうしてよいか判断がつかかねるらしく、なおしばらくは愚図々と躊躇らっていた。しかし、隣にいる箴が弾かれたように立ち上り、誠一の後につづいて出ようとするのを見て、ししぶ重い腰を上げかかった。

義智は怪訝な表情を浮べ、何か訳官に質問した。それに対し世雲が二言、三言答えたが、倭語の内容は理解できぬなりに、そのしどろもどろの態度より推して、譬えば副使は急病を起して退席するのだとでもいった、当り障りのない弁疏を口にはしているのは確実であるように思われた。誠一はふたたび訳官に向って声を励まし、先ほどの自分の言葉を一語一句誤りなく通弁するよう求めた……

もともと潮風に焼けている島主の赤銅色の面貌は、狼狽と恥辱のため菜莢ぐみのようになった。

そのあと彼のとつた行動は予想もつかぬものであった。

——使臣の面々を蔑ろにしようなどという意図は毛頭持つてはいない。充分の余裕を見はからつて居館を立ち出たにもかかわらず、途中の山坂に意外に暇どり遅参したのは、ひとえに昇夫かどかきどもの怠慢の故である。いわんや仏殿に乗り入れるに至つては、下郎の物識らずとは申せ憎みても余りある所業だ。この上はご面前にてかの者たちの首を刎ね、お詫びのしるしとして差し出すほかない……

言いつつ、腰に横たえた倭刀を不意に引き抜いた。随行している朝鮮側武官の帯剣と較べると倍近い長さがあり、剃刀に劣らぬほど鋭利に研ぎ澄まされた刃が折からの盛夏の烈日を燦々と弾き返した。

懼るべき論理の飛躍であつた。己れの罪をすべて下人に押し被せ、法に則つた裁きにも掛けず、一言の弁明の機会すら与えることなく、この場で私的に処断しようというのである。

義智自ら空いた方の手で領頸あうくびを捉え、四人の昇夫は堂前の地上に次々と引き据えられた。彼らが哀号の叫びを上げ逃げ惑うさまを想像して、誠一は思わず眼を閉じそうになつた。

しかし、そうした光景はけつして起らなかつた。下人どもは先刻よりの経緯つづに具さに立ち会い、忽卒の間に運命の遁れがたさを覚悟したらしい。全員が申し合わせたように顔色を変えもせず、哭き騒ぐでもなく、我から平然と首を差し伸べた。中の一人はむしろ仄かな笑みさえ唇に浮べて

いた。

白刃が無造作に宙に躍り、四人は生なき物体として庭に転がっていた。

水を打ち塩を撒き、血を淨め終ると、義智は何ごとともなかったように改めて宴席に加わり、使臣たちと談笑しつつ交酬しはじめた。

誠一の胸の底に、淡い傷みに似た悔いが残った。なさずもがなの己れの咎め立てが機縁となつて、思いがけず、下賤とはいへ四つの生命が敢えなく消えたのである。それにしても倭人は、人の死という何にもまして嚴肅な現象をどのように考えているのであろうか。顔貌かおたちや体格からいえばまったく自分たちと見分けのつかない隣国の民が、朝鮮人のみならず、かつて漢陽（ソウル）の王宮で幾度か接伴したことのある宗主国たる明国人と較べても、根本的に質を異にする奇蹟的な生きものと思えないのであった。

一岐でさらに数泊して、島夷べいより米斛べいの補給を受けた。島また島の茫々とした滄溟そうめいを横ぎり、赤間関からさきは凪いだ扶桑の内海にさしかかる。前途に待ち受けるものへの不安を紛らすように、金誠一はじめ、黄允吉、許篈は、巖頭に鳴く鶴、波浪に戯れる鷗を詩に詠じた。三人ともすでに家集を持つ、名の聞えた墨客である。倭人中ではただひとり、玄蘇のみに詩才があり、清興を共にした。

堺浜に上陸し、客館に指定された引接寺という仏刹に宿る。

ふたたび輕舟に分乗、摂陽の大河をさかのぼるに際して、たまたま一首が成った。

——重溟ヲ行キ尽クセドモ行クコト尽キズ、淀河ノ風浪夢猶オ驚カス、夜深ク星斗昭ラカニ回ル処、臥シテ隣船ニ聴ク一笛ノ声。

黎明の炎ゆるような色が河面を染める頃、早瀬にのぞんで水車の回転する小規模な城郭が見えた。

傍らで説明役を買って出ていた玄蘇が、誠一を顧みて、

「あれが澱城ですぞ」

と誇らしげに言う。

なるほど、ここが女郎城か。関白平秀吉が前君平信長の姪浅井氏なる美姫を愛し、その寵は正室をも凌ぐほどだという噂は彼の耳にも届いていた。そう思つて眺めれば城の形もどこやら柔媚で、河の上まで脂粉の香が漂ってくるようである。

誠一は聞きようによつてはやや皮肉ともとれる口調で、感想を陳べた。

「わが朝鮮においてもやはり、貴人の間に蓄妾の俗は一般的です。およそ士大夫以上の者で、身の廻りの世話をさせる女子の一人や二人置かぬ例はないとすらいえるでしょう。だが、それらはすべて卑しい妓生の中より択ばれます。己が主人の血筋を思いものとして洞房の奥深く閉じこめ

るなどとは聞いたためしありません。仮にそうした理不尽な辱めに遭ったとすれば、韓の女人なら操を全うするために、自死を賭してでも拒みます」

倭人中最も学殖のある玄蘇は、急に顔を背けると、何も聞えなかった振りをした。

むしろ二、三步離れたところにいた副官義智の眼が、異様に冷やかな光を帯び誠一を凝視しているように思われた。それは二ヵ月あまり前、対馬島において四人の昇夫を斬り捨てたとき、彼の浮べていた表情にそっくりであった。

しかし、それも一瞬の出来事で、副官の眸はすぐ炯々とした炫^{かがや}きを消し、二つの窩^{あな}のように無感動な黯^{くろ}さに戻った。噂によればこの二十歳そこそこの若者は、関白の腹心である平（小西）行長の愛娘を娶っており、義父に倣って自らも吉利支丹に入信しているとされている。そしてかの南蛮の宗派はどうやら、婚姻における一夫一婦の定めに閑しては殊のほか厳格なのだそうである。それにあの事件以来、彼は誠一を憚り、遠くからその姿を見かけてさえ馬を下り目礼するま
でになっていた。

万曆十八年七月二十二日、照りつける西日の中を蛭都に入った。釜山浦を発船してより満^{ミツ}二ヵ月ぶりである。

「清道^{チョウド}」と二つの文字を大きく刺繍した旗が先頭に立っている。箠^{えびら}を背負った一騎がそれにつづき、その後から楽隊が進んだ。喇叭^{フエ}、螺角^{ワカク}、鐃^{ウチ}、小笥^{コグ}、太平簫^{テイペイセン}、嗜吟^{シヤイン}、鼉鼓^{リョコ}、杖鼓^{ウチウダ}、奚琴^{ヘギム}が勇

壮に、また哀切に奏せられていた。彼らはみな草笠チヨリブをかぶっていたが、その広い鏢の下から覗いている額には、残暑の酷しさのせいばかりでなく、なぜとも知れぬ気の昂ぶりのために汗がしとどに流れていた。

街衢を埋め尽くす好奇心に満ちた老幼男女の眼に、朝鮮人たちは囲まれていた。虎か何かこの国には産しない珍奇な動物にでもなつて己れらが見守られているような、不思議な感じに誠一は襲われた。

高齢のゆえであろう、旅中いちばん疲労の色を濃く滲ませていた允吉は、倭の境を越えると同じ時に、安堵したように平服に着替えた。そして倭の役人の奨めるままに、喜んで異国の轎に乗った。この乗物は屋根が低いので、冠は脱ぎ去り、醜い姿勢で腰を曲げて身を容れるのをも厭わなかった。誠一はその非なることを弁じ立てたが、一向に聞き入れられず、やがて書状官も正使を真似るようになった。

侮りを招くのを虞れて、倭人がたとえひとりでも一緒にいるところでは、誠一はけつして冠帯を解こうとはしなかった。外出するに当つては、本国からわざわざ吊らせてきた輿こしをかならず用いるよう心がけていた。したがってこのときも、韓の礼装をまとい何の覆いもない乗物に揺られてゆく彼の上だけに、多くの視線が集中した。

——この日、倭都の士女、国を傾け出でて観ること宮娃きやうわい（宮廷の美姬）、達官（顯官）に至る。